

第 1566 回 (2 月 16 日)

都市近郊における農家生活の諸相

——愛知県海部郡十四山村の

事例に基づいて——

石 原 豊 美

都市近郊に位置する、混住化の進んだ地域にあって、農家生活がどのようなものとして営まれているか。1992 年夏に名古屋市の近郊農村で実施した調査結果に基づいて、断片的ながらこの課題に関わるいくつかの特徴を指摘した。

調査対象地海部郡十四山村は、木曽川河口部のいわゆる海拔ゼロメートル地帯内に位置している。低湿地帯にあって住宅開発に適さない上に村の全域が市街化調整区域となっており、立地条件に照らすに、世帯数や人口の増加が緩やかなものとなっている。

村には小規模の事業所も多いが、水田地帯で、稲と自給用野菜とを作付けている農家が大半である。村全体が大きな被害を被った伊勢湾台風(昭和 34 年 9 月)を契機に、農家の男女は農外就労に傾斜していき、現在までに第二種兼業農家が殆どとなっている。また、村では稲作の作業委託が進展し、農家の 8 割近くが全ての機械作業を農協に委託している。

村の中で最近 20 年以内に急速に混住化の進んだ一集落(五斗山集落)に着目し、事例的に実態把握を行った。結果の一部を、以下のように要約することができる。

第一に、世帯構成の変動とそれに伴う集落の社会関係のあり様について。五斗山集落では 1970 年代から 80 年代にかけて、工場跡地への住宅開発などにより、非農家世帯群の流入がみられた。この中で、3 つの群をなす非農家世帯(社宅、一戸建て建売り住宅、および分譲マンション)についてはそれぞれが独立した自治会を形成し、集落の総会などへは代表者のみが出席する。集落の役員は農家の

中から選出され、また隣組や講組のような生活互助組織は、農家と非農家のごく一部(農家からの分家世帯など)によって構成されている。

第二に、農家成員の就業上の特徴について。五斗山集落の農家 27 戸は、0.5~1.0 ha 層が多く、稲と自給用野菜の作付けをしているのみの農家が大半である。農外就労を主とする者が多く、就業上の経歴をあとづけてみると、一貫して農外就業を中心としてきた男女が全体の半数近い。(戦後生まれの世代では殆どがそうである。)それ以外に、臨時雇としての農外就業と農業とをいわば併行して行ってきた男女——大正から昭和戦前生まれ——の多さが特徴的である。就業機会の豊富な地域的条件下に支えられて、また稲作の作業委託が進んだ中で、農外就業が男女を問わず積極的に行われているが、就業の仕方やそれに伴う生活スタイルの変化がみられ、家族関係にも影響が及んでいる。(なお、五斗山集落の場合、機械作業を全面的には委託してしまわない農家が約半数あり、村の中でこの集落の位置を独特なものとしている。)

第三に、農家の家族関係、特に世代間の分業のあり方をめぐって。同居する二世代の夫婦間でどのような分業がなされているかを概観すると、買物や食事の支度等日常的な家事については二世代の女性(+第一世代の女性)が、会合出席については男性(各世代半々)が行っている。水田の管理は男性(各世代半々)、畑の管理は第一世代の女性の仕事となっている。世代と世代の間で、葛藤が生じる。年少世代の農業への関心と関与の度合(の低さの認知)が主な原因となっており、年長世代の側から不満が表出される。女性たちはしばしば家族に関する事柄(結婚や出産、孫の誕生など)を契機として転/辞職しているが、特に年少世代の女性の農外就業継続との関連で適応形態は多様である。